



ラオスで「歴史」を考える

やぎ さわ かつ まさ
八木 沢 克 昌

社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）タイ・ラオス事務所長

今年、戦後60年、ベトナム戦争終結30年、ラオスの現政権樹立30年、日本・ラオス外交樹立50周年と何かと、ここラオスでもラオス語で「プラワティサート」、すなわち「歴史」を振り返り考えることが多い年だ。

私自身、ラオスで国際協力NGOの職員として駐在し2年半が経つ。最初のラオス訪問から20年が経過した。毎年のようにラオスを訪問していた。ラオスの隣国のタイに25年前から三回の駐在で通算すると16年駐在した。ラオスは民族的にも、文化、言語的にも近く理解し易い国だと思っていた。

しかしこれは見事に裏切られた。特に痛感するのは、ラオスの隣国タイとの間で、過去の侵略した側と侵略された側の歴史に対する認識の著しい差だ。わかりやすい例を挙げると、タイの首都バンコクの有名なエメラルド寺院のエメラルドの仏像は、ラオスからするとタイに略奪されたものになる。タイからすると、元々タイ領土にあったものをラオスから取り戻したことになっている。

さらにタイの近代史ではヴィエンチャンの反乱として描かれ、バンコク王朝に反逆した逆賊であるヴィエンチャンのアヌ王が、ラオスの側からすると国民的英雄としての高く評価されている。アヌ王はバンコクで晒し者に近い檻に入れられて溺死の刑を受けている。この関係は、フィリピンにおけるマゼランとラプラプの関係を思い出させる。

ラオスは日本の本州ほどの面積で、人口540万人が住む多民族国家である。国の四方を五つの国に囲まれ、北は中国、東はベトナム、南はカンボジア、西はタイ、北西はビルマ（ミャンマー）で、五つの国と国境を接する内陸国である。昨年11月にはアセアン加盟後初めて、国際社会に向けて国の威信を賭け、歴史的イベントとしてアセアン+3（中国、韓国、日本）サミットを開催し成功させた。日本からも小泉首相がサミットに参加している。

ラオスの友人たちの実際の生きた経験から、小国ラオスの歴史の悲劇を学び、これほど世界の大国と隣国に翻弄された国は少ないと痛感される。まず国境を接する5ヶ国すべての国に歴史上、侵略、弾圧、略奪、破壊、支配されてきた。

特にタイには、度重なる侵略と略奪、破壊、弾圧、支配を繰り返され、1828年には、現在の首都ヴィエンチャンが、当時のシャム（タイ）の侵略軍によって焼き尽くされて無人の都となった。さらにシャム建設のために多くのラオス人が奴隷としてシャムに連れ去られている。この時を契機に、ラオスは完全なシャムの属国となった。

1893年には、フランスとタイの間のシャム仏講和条約によりメコン川を挟んで、同じラオスの民族、親戚、兄弟、血を分けた人々の住む国土が二分された。メコン川の東岸はフランスの植民地となっている。そしてメコン川の西岸は現在に至る



までタイの領土となり、現在は東北タイ（イサーン）と呼ばれている。

さらにフランスの植民地時代は、カンボジア同様に、ラオスを統治するためにベトナム人を官吏として登用したため、ベトナム人がラオス人の主人的構図となってしまった。現在のラオスは、政治的にはベトナムとの関係を抜きには成り立たない。

1960年代になると、フランスの植民地・侵略に対して解放戦争を戦い勝利を得た。しかしその後はフランスに代わりアメリカがラオスの内戦を機に介入し、泥沼のラオス内戦に突入した。ホーチミンルートがラオス国内を通ることもあり、アメリカによりラオス国土の3分の2に無差別爆撃をこうむり大小の都市、村が灰となった。ラオスの人口は当時300万人あった。アメリカが落とす爆弾は、300万トンといわれ、ラオスの国民一人1トンの爆弾が落とされ、今も不発弾として残っている。

1975年12月、荒廃した国土の上にラオス人民革命党が社会主義国、現在のラオス、正式名「ラオス人民民主共和国」が設立された。新政権はこれまでの西側諸国の援助に代わり、同じ社会主義のソ連と東欧の国々の援助によって国家の再建が行われた。多くのラオス人がソ連や東欧に留学した。しかしソ連の崩壊後は、再び西側の援助が中心となって、現在はラオスに対する国別の援助は日本

が断トツで、43パーセントを占めている。2位が中国の17パーセントである。

ラオスは歴史だけでも極めて複雑といえる。またラオスとタイだけでなく、同様に同じインドシナの国タイとカンボジアの関係、カンボジアとベトナムの関係、タイとビルマの関係も侵略と支配の歴史である。現在のインドシナの経済大国化したタイのパーツ経済圏の拡大やテレビ等を通じた文化の隣国への侵入を反映して、国民感情は憧れ、劣等感、妬みと複雑に入れ混じっている。典型的な例は数年前のカンボジアでのタイ大使館等の焼き討ち事件である。またカンボジア国内でのベトナム人に対する極端な嫌悪感と差別にも現れている。

「歴史」という言葉が、今年は繰り返し日本と中国、韓国の外交関係の中で使われている。「理解」とは、ラオス語やタイ語では心に入るという意味で、英語ではアンダー・スタンドである。自分より下の立場になって初めて相手を理解できるという意味である。その国を理解し、またその国との関係を知り、そして痛みを理解する必要があるが、真の「歴史」そのものを理解することの大切さと難しさを痛感させられるこの頃である。